

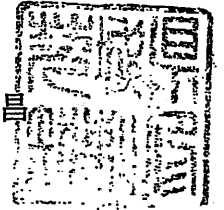
河 第 658 号

平成18年12月27日

国土交通省関東地方整備局長

中 島 威 夫 様

茨城県知事 橋 本



八ッ場ダム建設事業におけるダムサイトの地盤等について（照会）

本県の河川行政の推進につきましては、日頃から種々の御配意を賜り感謝いたします。

さて、八ッ場ダム建設事業に係る茨城県知事外1名を被告とした公金支出差止等請求事件（水戸地裁平成16年（行ウ）第20号）に関しまして、平成18年9月15日付け河第459号で、八ッ場ダムによる利根川の治水効果について貴職の見解を確認させていただいたところです。原告らは、さらに、八ッ場ダムのダムサイトの基礎岩盤に固有の欠陥があり、建設したとしても治水・利水いずれの機能も果たし得ない等の主張をしています。

つきましては、原告らの別紙記載の主張について貴職の御見解を確認させていただきたく照会します。

証号171乙

- 1 中和生成物の堆積で品木ダムが飽和状態となった場合、ハッ場ダムがその役割を果たすこととなり、ハッ場ダムは通常のダム機能を早期に失うこととなる

ハッ場ダム計画のある吾妻川は強酸性の河川であり、河川管理者である国土交通大臣は、そこに石灰を投入することで河川水を中和しているが、この作業により発生する中和生成物を沈殿させるため、品木ダムを建設している。品木ダムは、その中和生成物の堆積により、まもなく飽和状態に達しようとしており、仮に品木ダムが飽和状態となった場合は、それに代わる中和生成物の沈殿池は下流のハッ場ダムが果たすこととなる。ハッ場ダム計画で想定している堆積量には、この中和生成物の堆積量は考慮されていないため、品木ダムで対応できなくなった場合は、ハッ場ダムで計画された治水及び利水容量が確保できなくなることから、ダム本来の機能が計画より短期間で失われてしまうこととなる。

- 2 ダムサイト岩盤には脆弱性、危険性の問題がある

- (1) ダムサイトには擾乱帯じょうらんや熱水変質帯が存在している

コンクリート堤体のような巨大な構造物を受ける基礎地盤は、十分な強度を備えていなければならないが、堤体がのる左岸岩盤には、ダム基礎としては不適合とされる「CL級岩盤」で構成される擾乱帯がある。

国土交通省が調査を委託した地質調査会社は、ダム建設のためには「CL級」の脆弱な岩盤を削り取りコンクリートに置き換えることを提案している（甲D第1号証）が、国土交通省はこの提案を取り入れていない。

また、ダムサイト右岸のダム軸直上流に温泉の熱水変質をうけボロボロになった地質があり、さらにその上流側に行くほどこの熱水変質帯が帯を占めるようになる。ダム計画のダム軸は、このスレーキング（吸湿・乾燥の繰り返しにより岩石が破壊されて土砂状になる現象）している岩盤を避けて下流側へずらしているが、その距離はわずか40mしかなく、ダムサイトの直上流まで熱水変質帯が迫っている。

ダムサイト岩盤としては不適合である。

(2) ダム基礎岩盤が高透水である

ハツ場ダムのダムサイト岩盤のルジオン値は異常に高く、その遮水工法としてカーテングラウチングでダム基礎部の全部を巻く工法を採用しようとしているが、ダムサイトの岩盤の高透水帯と難透水帯の区分ができていない等その施工範囲などの詳細は決まっておらず、現在までに何度も地質調査を繰り返している。また、ダム基礎岩盤の遮水性の確保については、「建設省河川砂防技術基準（案）同解説（設計編Ⅰ）」で明記されているコンクリートダムの場合の基準である1～2ルジオンを確保することが必要であるが、これまでの調査をもってしてもカーテングラウチングの施工範囲が決定できない状況では、その遮水性確保は容易ではない。これらのことから、ハツ場ダム基礎岩盤は、技術上の問題が山積している。

ダムサイト左岸については、平成15年度に実施した各地質調査（甲D第2号証、甲D第4号証）において、高透水帯の連続や地下水位の多重構造などが明らかになったが、これらの高透水帯の連続や地下水位の多重構造などは、低角度割れ目が水平方向に連続しているために形成されるものと考えられ、この基礎岩盤構造から考えると、岩盤同士の密着性が著しく低下するため、全体のせん断強度の低下が懸念され、ダム基礎岩盤として不適切である。

ダムサイトの右岸については、平成15年度に実施した地質調査（甲D第3号証）によると、斜面表層部や地山深部の貫入岩脈沿い等に高透水ゾーンが認められ、また、山側から河床標高へと流れ落ちるような地下水瀑（滝）が見つかり、遮水性確保のうえで極めて困難となる新たな問題が持ち上がっている。

このように、ハツ場ダム建設計画のダムサイトは、ダム基礎地盤としての基本条件を欠いている。

(3) ダムサイトの岩盤はブロック化と断層でせん断強度（安全度）が大幅に低下している

ダムサイト予定地の両岸に垂直大亀裂と貫入岩脈が存在し、これに加えて何層にもわたる低角度亀裂によって、ダムサイト地盤は、ブロック化し

一体性を損ねている。このことから、ダム堤体は、地山から分離した岩盤の上に乗ることになる。

さらに、群馬県発行の国土調査「土地分類基本調査・草津」の表層地質図（甲D第5号証の2）には、ダム堤体の右袖部をかすめる形で断層が揭示されているが、この断層に関しては、昭和45年6月当時、建設省・文化庁がその存在を確認した上、ダムサイト地盤として不適であるとして国会答弁し、ダム計画は一旦中止となった経緯がある。この断層により、右岸の岩盤は一層不安定になっている。

これらのことから、八ッ場ダムダムサイトはダム基礎地盤として不適である。

（4）八ッ場安山岩層は陸成であり、ダム建設には不適である

八ッ場ダムの基礎岩盤である安山岩の形成については、地元地質研究者は陸上で形成されたとし、また、地質調査でも陸上起源の堆積物であるとする指摘もあり（甲D第4号証）、陸上で形成されたものである。

通常、ダム基礎となる岩盤としては、陸成は不適であり、水成であることが求められるが、この点からもダム基礎地盤としては不適である。

以上